

桜区を知る

サクラソウ



さいたま市立桜図書館

1. サクラソウ（桜草）

サクラソウは、川岸や山野の湿地に生える多年草で、春には、ピンク色の花を咲かせます。花の形がサクラに似ているので、この名前があります。

サクラソウ（和名）の正式な名前は「プリムラ・シーボルディ」（*Primula sieboldii* E.Morren）。「プリムラ」とは、ラテン語で「最初の」という意味で、サクラソウの仲間が、春の最初に咲く花だからです。

「シーボルディ」は、E.モールという学者が、江戸時代に長崎にやってきたドイツ人医師シーボルトの名をとり、命名しました。植物分類学上では、種子植物門・被子植物亜門・双子葉植物綱・後生花被亜綱・サクラソウ目・サクラソウ科・サクラソウ属となっています。

西洋では、サクラソウのことをプリムラ、またはプリムローズ（英名）といいます。

サクラソウのはじまりは、遠くヒマラヤ草原と言われ、ここからさまざまに変化しながら世界に広がり、約 550 種に仲間を増やしました。サクラソウは、中国北部を主として、北半球で生息しています。

日本では、九州から北海道までの各地で見られ、八ヶ岳山麓や軽井沢、阿蘇山などが有名ですが、現在では田島ヶ原が、日本最大のサクラソウの群落となっています。

野生のサクラソウは、ひとつひとつ、花びらの色や形、花のつき方などに違いがあります。これほど変化がある植物はめずらしく、学問上にも価値が高い植物です。

2. ^{たしまがはらにせいち}田島ヶ原自生地

昔、荒川はたびたび氾濫し、上流から養分のある土が流れて湿地になり、サクラソウには絶好の環境でした。春になると、一面ピンク色にそまり、江戸時代からサクラソウ見物に多くの人が遊びにきて、^{おくはら}尾久の原（荒川区）、^{うきまがはら}浮間ヶ原（東京都北区）、^{にしきのはら}錦乃原（西区）などが知られていました。

大正9（1920）年に「土合村桜草自生地」（今の田島ヶ原）が天然記念物に指定され、地域の人たちも土合保勝会を作り、大切に世話をしました。昭和27（1925）年には、特別天然記念物に指定されました。現在「田島ヶ原サクラソウ自生地」と呼ばれるこの地は、荒川沿いでは唯一のサクラソウ自生地であり、国の指定を受けているサクラソウ自生地はここだけです。

田島ヶ原サクラソウ自生地は面積約4ha、サクラソウは61万株、その他にノウルシ、チョウジソウ、ノカラムツ、オギなど約250種の野草が生えています。4月には「さくら草まつり」が開かれるなど、サクラソウは市民に愛されています。

現在は、さいたま市が田島ヶ原自生地の管理をしています。

3. サクラソウ自生地の一年

サクラソウは、3月末頃から咲き始め、4月中旬に見頃をむかえます。

花の寿命は10日くらいで、4月末まで楽しむことができますが、花が終わると、丈の高いオギやヨシが茂り、これらの植物の下に隠れてしまいます。サクラソウは、この時期に種子を散らし、葉が枯れていきます。

秋になると、自生地は一面緑色の風景から変化し、ススキなどが目立つようになります。サクラソウは地下茎に芽をつくり、春の準備を始めます。

冬にはオギやヨシを焼却する草焼きが行われます。これによりサクラソウに養分が与えられ、春になるにつれ、地表に陽光が当たるようになります。

4. サクラソウは準絶滅危惧種

サクラソウは「絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅱ類）」に指定されたことがあり、全国でも野生のものは少なくなっています。自生地周辺の開発、川や土地の排水工事による湿地の乾燥化が進んだこと、サクラソウより強い植物が増えたこと、受粉の手伝いをする昆虫が減ったことなどが原因といわれています。

小5の教科書に「サクラソウとトラマルハナバチ」という文章が載り、受粉に必要なトラマルハナバチの減少が原因とする説が広く知られるようになりました。しかし、田島ヶ原でもそのまま当てはまるかは疑問とされています。自然界のことはまだまだ解

明されていないことが多いようです。別の大きな原因は、花を取っていく人やゴミを捨てたりバーベキューをしたりと自生地を荒らす人たちがたくさんいることです。荒らされた自生地を元にもどすには、多くの人手とお金がかかります。

平成25年に環境省が公表した第4次レッドリストでは、保全のための努力が払われ、絶滅の危険性が下がったことにより、サクラソウは「準絶滅危惧種」となっています。

西区の錦乃原では、昭和9（1934）年に「天然記念物馬宮村桜草自生地」の指定を受けましたが、サクラソウがなくなり、昭和27（1952）年にとりやめになりました。現在、近くの小学校では、子どもたちがサクラソウを育て、錦乃原に植える活動を続けています。注：「小5国語上」光村図書

5. 江戸時代のサクラソウ

徳川家康が、鷹狩りで野生のサクラソウを見て、江戸城に持ち帰ったのがきっかけで、浮間ヶ原のサクラソウが有名になったといわれています。江戸の人たちは、春には荒川のサクラソウ見物を楽しみました。園芸も盛んで、変わった花を探したり種から育てたり、いろいろな品種を作りました。園芸用の品種は、江戸時代から昭和まで500種もあります。

6. サクラソウの花言葉

希望、青春の始まりと悲しみ

『花言葉花贈り』池田書店

7. 県の花・市の花

昭和46(1971)年11月に、埼玉100年記念行事が行われ、サクラソウが県花に指定されました。翌年の4月には浦和市の花に、平成14(2002)年5月にはさいたま市の花になりました。

8. サクラソウを歌った俳句と短歌

盛り切りの飯売るみせやさくら草 溝口素丸

我国は草もさくらを咲にけり 小林一茶

桜草灯火に置いて夕餉かな 富田木歩

むかしの日姉とおもひし桜草

いもうととして君をつちか 与謝野晶子

ひもすから南の風が吹き通る

田島ヶ原にさくら草咲く 青木義脩

9. サクラソウの伝説

☆白馬岳の桜草

『日本の民話300』池原昭治著 木馬書館より

昔、白馬岳には純白の大桜草が咲いていました。あるとき、ふもとに住む長者の娘たまきは、見知らぬ若者と恋におち、毎晩、ひそかに会うようになりました。これが長者に知れ、別れなければ若者を殺すといわれます。

たまきは家をぬけだし、会えなくなったことを伝えると、若者はおそろしい正体をあらわします。男は白馬岳の魔人、大婆王だったのです。大婆王は、たまきをかかえて雨雲に乗り、白馬岳の頂上に飛ぶと、たまきを八つ裂きにしました。たまきの血が、純白の大桜草のつぼみに降りかかり、その時から白馬岳の桜草は紅紫色の花をつけるようになったといわれています。

☆プリムローズ 『ギリシャ神話』

花の女神、フローラの息子バラリソスは、恋人の妖精に失恋したためにすっかりやつれ、ついには死んでしまいます。母フローラはわが子をかわいそうに思い、バラリソスを春一番に咲くサクラソウ（プリムローズ）に変えたといわれています。

☆鍵の花 ドイツ伝説『植物と神話』近藤米吉編著 雪華社より

昔、ドイツの田舎にリスベスという娘がいました。リスベスは病気の母のために、野原へ花を摘みに出かけます。すると花の精が現れてサクラソウの花束を渡し、これを城の門の鍵穴に差すと門が開くので、城に来るようにと言います。リスベスが花の精の城を訪ねると、門も部屋の扉もサクラソウの花で開きました。リスベスは宝物をもらって家に帰ります。母親はとても喜んで、病気も治り、2人は幸せに暮らしました。この話からドイツでは、サクラソウを「鍵の花」と呼んでいます。

10. サクラソウが出てくる物語

『花咲か』岩崎京子作 偕成社

江戸時代、指扇に住んでいた常七は、川原に咲いていたサクラソウを植えて、江戸の町で売りました。

『グレイ・ラビットのおはなし』アリソン・アトリー作 岩波書店
グレイ・ラビットはプリムローズ（サクラソウ）で、
お酒を作ります。

『桜草をのせた汽車』ジリアン・クロス作 ぬぶん児童図書出版
主人公たちは、最後の場面で開通のお祝いに、列車に
桜草をまきます。

『床下の小人たち』メアリー・ノートン作 岩波書店
小人のアリエッティは、初めて外に出たときに、ひと
むれのサクラ草をみつけて、葉の上に腰をおろします。
1本つみとって、両手で日傘のようにかざしてみました。

参考資料の紹介

さいたま市ホームページ (<http://www.city.saitama.jp>)

特別天然記念物 田島ヶ原サクラソウ自生地観察の手引き

さいたま市教育委員会

田島ヶ原のさくら草 浦和市

サクラソウの目 鷺谷いづみ著 地人書館

まわってめぐってみんなの荒川 野村圭佑編著 どうぶつ社

浦和を知る事典 青木義脩著 さきたま出版会

さくらそう通信 Vol.1～27 さいたま市教育委員会

バックナンバーはさいたま市のホームページで見ることができます。

桜草コレクション 野新田桜草の会ホームページ

<令和4年7月改訂>